化粧品・健康食品会社コールセンター勤務 × 電話相談ボランティア

勤務先も一緒に社会貢献

松山 啓子さん
Keiko Matsuyama

活動のきっかけ：ボランティア養成講座の受講
参加している活動：女性の電話相談ボランティア
仕　　事：社員の顧客対応研修（常勤）

「NPO法人かながわ女のスペースみずら」は女性の権利擁護活動に取り組むNPOです。活動の１つとして、女性のあらゆる相談に応じる「みずら相談室」を開設しています。そこで月に２回、土曜の午後に電話相談員としてボランティアをしている松山さんは、株式会社ファンケルの社員です。会社での業務は、社内にあるコールセンターのオペレーター育成を担当しています。

仕事をしながらでも受講できるボランティア養成講座を探していた松山さんは、休日に開催していた「みずら相談室」のボランティア電話相談員養成講座が目に留まり、受講しました。受講後、ボランティアは自分の都合がつく時間に無理なくできると言われ、相談員として登録し活動に参加するようになりました。

勤務先と連携しての地域貢献・社会貢献

松山さんは、このほど同社の従業員が運営している制度「もっと何かできるはず基金」の寄付先として、「NPO法人かながわ女のスペースみずら」を申請しました。「もっと何かできるはず基金」は、基金の会員となっている従業員から申請された寄付先に対して、会員の給料からの天引き額と、さらに会社の承認が得られればその同額が会社から上乗せされ、団体に寄付される制度です。ファンケルでは、この基金やボランティア休暇制度等により、従業員が働きながらでも社会貢献活動に参加しやすいように支援しています。

ファンケルでは他にも、地域の福祉施設との交流を20年以上続けています。松山さんは以前、この施設の重度障がいのある利用者の方に成人式のメイクアップのお手伝いをすることを発案し、会社の取締役に提案しました。その提案は会社に受け入れられ、現在は会社の担当部門に引き継ぎ、業務として継続されています。

学びと発見

仕事でオペレーターを育成し、産業カウンセラーの資格を持つ松山さんでも、ボランティアでは様々なことを学び、新たな発見をすることがあります。「相談電話を受けることで、実際に困っている人がたくさんいること、そういう状況の中に自分はいないことなど、あらためて思い知らされた。」と松山さんは言います。「まだまだ自分の中では自己満足の域を出ていない」とのことですが、一方で「たとえ自己満足でも長く続けていると、何かの縁で違う形で助けになれる」とも感じています。

ずっと仕事をしながら、3人の息子を育ててきたという松山さん。現在子育てもほぼ終わり余裕ができてきたので、これからはもっとボランティア活動の時間を増やしていきたいと考えています。

NPO法人かながわ女のスペースみずら
◎「みずら相談室」（無料）　045-451-0740
相談時間：月～金　14:00 ～ 17:00 および 18:00 ～ 20:00
土　14:00 ～ 17:00
◎みずら専門相談
弁護士による法律相談　7,000円（1時間）
臨床心理士によるカウンセリング　5,000円（50分）
◎女性への暴力相談「週末ホットライン」　045-451-0740
相談時間：土・日・祝日の金曜　17:00 ～ 21:00

まちづくりについての情報を募集しています。

まちづくりに関するイベントや参加者募集、地域で行っているまちづくりの取組みなどの情報を下記までお知らせください。このページ及びメールマガジン「ヨコハマ人・まち」で広報のお手伝いをします。
情報提供のあて先：
横浜市　都市整備局　都市づくり部　地域まちづくり課
Tel 045-671-2696　Fax 045-663-8641
E-mail tb-chiikimachika@city.yokohama.jp

「ヨコハマ人・まち」のメールマガジンは地域まちづくりに関心のある方への転送、お誘い大歓迎です。
メールマガジンの配信申込み・停止は、下記のアドレスからお願いします。
http://ml.city.yokohama.jp/mailman/listinfo/hitomachi

★「ヨコハマ人・まち」バックナンバーはこちら
http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/chiikimachi/hitomati/back_num/

平成23年 3月発行

ヨコハマ人・まち
－まちの人がまちをつくる－

発行：横浜市 都市整備局 都市づくり部 地域まちづくり課
Tel 045-671-2696　Fax 045-663-8641　E-mail：tb-chiikimachika@city.yokohama.jp
取材・編集：NPO法人 市民セクターよこはま
Tel 045-222-6501　Fax 045-222-6502　E-mail：info@shimin-sector.jp
vol.36

今号のテーマ

地域づくりの新しい担い手は、私？

働く私の地域参加

経営コンサルタント × まちづくり活動

化粧品・健康食品会社コールセンター勤務 × 電話相談ボランティア

大学勤務 × 日本語ボランティア

NPO勤務 × 障がい児支援活動

情報システム会社勤務 × ガールスカウト

市民による地域づくりを進める上で、「もっと担い手がいてほしい」という声をよく聞きます。活動の担い手としては、従来から「退職者」「主婦」「学生」などがよくあげられてきました。今号では「働く人」に焦点を合わせ、企業等で働きながら地域活動や市民活動に参加することを考えます。

みなさんは日々の生活の中で、何らかの形で地域社会へ貢献することに関心をお持ちではないでしょうか。「何かしたい」と思っていても、どのようなきっかけで活動に参加できるのか。どのように活動を広げていけるのか。今回は、実際に仕事と活動の両立を実践している5名の方の事例をご紹介します。

働く人が、どんどん気軽に活動に参加することで、地域づくりはグンと進むはずです。

働く私の地域参加

情報システム会社勤務 × ガールスカウト

「親バカ」から、地域の子どもたちの成長サポートへ

小原 明洋さん
Akihiro Obara

活動のきっかけ：娘
参加している活動：ガールスカウトで子どもたちが成長する支援
仕　　事：情報システム会社勤務（常勤）

きっかけは「親バカ」

平日は会社員としてプログラマーの仕事をしている小原さん（戸塚区在住）は、2人の娘の父親。今では、日曜日になると、毎週のように地元のガールスカウト（神奈川県第92団）の活動に参加しています。

小原さんとガールスカウトとの出会いは5年前。小学生の娘に「テントで泊まる体験をさせたい」と親子でイベントに参加したところ、その指導者がガールスカウトのリーダーの方々だったのです。参加した娘は興味を持ち、ガールスカウトに入団しました。そして父親である小原さんも、ガールスカウトの「おやじの会」の一員としてお手伝いを始めました。

ガールスカウトのために　地域の子どもの成長のために

小原さんは、活動を手伝う中で、ガールスカウトに入っている中学生や高校生の行動力や発言に触れ、そのしっかりした態度に驚きました。これは決して学校で勉強しているだけでは学べないことだ、と関心を高めた小原さんは、どのように子どもと接すればいいのかガールスカウトの研修を受け、「1人の親」という立場を超えて活動に関わるようになりました。子どもたちが話し合いをする中での助言、IT機器を操作しての活動の記録、火の起こし方や包丁の使い方といった野外活動に関することなど、ガールスカウトの活動において様々なサポートをしています。時には子どもたちと一緒に地域の中で、区の防災イベントの手伝いや、近くの川の清掃、ユニセフの街頭募金を呼びかけるときもあります。

最初は自分の子どもがきっかけでしたが、一緒にいる他の子どもたちといると、いろいろなことを学べ、経験でき、楽しい、という小原さん。これからも、少女たちが自ら考え、行動できる女性に成長できるように「やれることは何でもやる」と考えています。

ガールスカウト
現在世界145の国や地域で、約1,000万人の会員が活動している、少女と若い女性のための社会教育団体。「少女と若い女性が責任ある世界市民として、自ら考え、行動できる人となる」ことを目指して、「自己開発」「人とのまじわり」「自然と共に」の3つをポイントに活動をしています。

大学勤務 × 日本語ボランティア

一枚のポスターをきっかけとして

柴田 祐美さん
Yumi Shibata

活動のきっかけ：町内に掲示してあったポスター
参加している活動：日本語ボランティアグループ
仕　　事：大学のボランティアセンター勤務（非常勤）

1枚のポスターから

柴田さん（泉区在住）が、町内会の掲示板で日本語ボランティアグループ「ジャボラ」のポスターを見つけたのは、7年ほど前のことでした。

当時、子ども2人を育てる専業主婦だった柴田さんは、ちょうどその頃、少し子どもが手から離れるようになり、外に出るきっかけを探していました。ポスターは決して目を引くようなものではありませんでしたが、もともと日本語ボランティアに興味があり、活動の場も自宅近くだったので、軽い気持ちで出かけました。それが「ジャボラ」との出会いです。

続けることが大事

「ジャボラ」は、現在10名ほどのメンバーで活動をしています。区内にある外国につながる児童が多数通う小学校の国際教室に入り、児童への学習支援や保護者への日本語の支援を行うのが主な活動です。柴田さんは、「先生、今度はいつ来てくれるの？」と、子どもたちに求められることがうれしく、行くたびに成長している様子を見るのが楽しいと言います。

柴田さんは、「ジャボラ」に関わるようになった後、地域の大学のボランティアセンターに週4日勤務することになり、ボランティアと仕事がリンクし始めました。日中の活動に参加できる日は限られるようになりましたが、仕事を通じて身に付けたパソコンの操作などを活かし、「ジャボラ」の広報担当として、少しでも誰かの目に留まるようなチラシを作りたいと、試行錯誤しています。仕事においても、地域で自らボランティアを行っていることで、プラスに感じることが多く、このバランスを保っていきたいそうです。

「続けることが大事」と語る柴田さん。家庭も仕事もボランティアもすべて続けるために、時間の使い方をもっとうまくすることが当面の目標です。

NPO勤務 × 障がい児支援活動

どんどん広がる、導かれる、活動の舞台

古市 麻里さん
Mari Furuichi

活動のきっかけ：息子
参加している活動：障がい児やその保護者による当事者活動
仕　　事：移動サービスを支援するNPO勤務（非常勤）

どんどん広がる活動の場　導かれた役割

古市さん（旭区在住）は、小学生の子どもが3人います。3人目のお子さんには障がいがあるのですが、毎週末は区の障害児地域訓練会の活動に参加しています。

障害児地域訓練会は、障がいのある子どもが地域のボランティアとともに活動する場であるとともに、親の居場所としての役割があります。古市さんは数年前、先輩の勧めで区の訓練会が加盟している全市の組織「横浜障害児を守る連絡協議会」の保育・就学部長を引き受けました。すると、100人規模の勉強会で司会やあいさつをしたり、企画の調整をしたりと、活躍の舞台が広がりました。現在は、横浜市の「障害者施策検討部会専門委員会」の委員としても活躍しています。

その委員会で、現在の職場「NPO法人 横浜移動サービス協議会」の副理事長と出会い、利用者と提供側が対岸に別れずに一緒につくっていく福祉の架け橋になれればいいと、仕事をしています。同じ障がい分野とはいえ、移動サービスについてはあまり知らなかったという古市さんですが、自らに与えられた役割は導かれたものと考え、週2～3日の勤務の中で精力的に仕事をしています。

人との「つながり」　すべてが糧となる

このように、どんどん活躍の舞台を広げてきた秘訣は何でしょう。古市さんの口からは「つながり」というキーワードが出てきました。「いろいろな人とやっていくということは、ときに面倒な場合もあるが、それを抜きにして成果はない」と言います。確かに、やるかやらないかを考えるとき、そのときはプラスになるかマイナスになるか分からないわけですが、これまでの経験から「すべての経験は糧になった」と実感できているそうです。

小さな子どもたちを育てながら、家族の協力もあり、スケジュールが活動の予定で埋め尽くされる充実した毎日が続きます。

障害児地域訓練会
障がい児の保護者等が自主的に組織し、地域において障がい児を対象に生活指導や機能回復訓練などを実施しています。

経営コンサルタント × まちづくり活動

日常より1歩踏み出し、それぞれの役割を担うこと

末永 浩之さん
Hiroyuki Suenaga

活動のきっかけ：仕事で出会った人のお誘い
参加している活動：まちづくりＮＰＯのメンバー、地元のまちづくりグループの代表、ヨコハマ市民まち普請事業部会の市民委員
仕　　事：生命保険会社所属のコンサルタント

人はみんな自分ができる役割をもっている

末永さん（港北区在住）の職業は、生命保険会社のコンサルタントです。仕事以外でも複数の団体で活動をし、所属団体によってそれぞれ違った役割を持っています。まず1つは、まちづくり活動を行う「NPO法人 文化メリットを創る会（CCA）」の中で“プロジェクトコンセプトメーカー”という役割を担っています。また、地元の町内会に関連する「錦が丘・緑豊かな街並みをつくる会」では代表を務めています。そしてもう1つ、ヨコハマ市民まち普請事業では審査委員会の市民委員です。

末永さんは、商社に15年勤めた後、知り合いの会社で経営コンサルタントとして勤務していたころ、CCAと出会い関わるようになりました。最初はNPOのこともよくわからず、自分にできることがあるのかも分からない中、少しでも何かできることがあればとの想いで参加しました。しかし、今では活動の場を広げ、場に応じた自分の役割を予測し、関われるようになっています。末永さんは「人はみんなそれぞれができる役割を持っている」と考え、自分でもできることをするようにしています。そして、「横浜に貢献したいと自ら動く人が増えること」を理想として抱いています。

日常より1歩踏み出すこと

CCAの活動を通して、ヨコハマ市民まち普請事業とも出会い、今は審査委員として関わっています。他の委員のように専門家ではなく、市民委員という立場で、提案者と同じまちづくり活動をしている仲間として発言し、審査するようにしています。

地元の活動では、街の緑や景観の問題に取り組んでいます。これは町内会の回覧板で情報を見て、「何か手伝えることがあれば言ってください」とそこに書き込んだのがきっかけでした。

いろいろ活動を広げている末永さん。ちょっと意識してみれば、「始めるきっかけはいろいろなところにある」と言います。日常より一歩踏み出しつつ、できる範囲内で続けることが活動のコツのようです。

ヨコハマ市民まち普請事業
市民の皆さんのアイデアで市民の皆さんが行うまちのハード整備に対し、横浜市が最高500万円の整備助成金の交付や整備に向けた活動に対する支援を行う事業です。まちづくりのアイデアは、2段階の公開コンテストで選考されます。